

菅官房長官と「寸法記」

西村 貞雄

首里城が焼失してから2年が過ぎようとしている。この間、コロナ禍、安倍総理退任から菅義偉総理大臣就任という目まぐるしい年間であった。首里城再建という動きが顕著になり、早々と動き出したのが高良倉吉氏であった。

菅義偉総理が官房長官時代に、高良倉吉氏が交渉している情景をテレビ、新聞等でみた。焼失して2、3日後に沖縄の某テレビ局のインタビューで、高良氏が「寸法記」の冊子を胸に当て、平成の復元ではこの「寸法記」でもって復元したので、以前と違って迷うことはなく、直ぐにでも再建は可能である、ということと話していた。その翌日には、菅官房長官との折衝をしているとの情報がマスコミを通じて報道された。

その後、高良氏が委員長になって技術検討委員会が組織化され、急速に進んでいった。その経緯を顧みると、仲井真知事時代に高良氏は副知事であったことで、菅官房長官とはかなり密な関係があることを関係者から聞いていたことを思い出した。今回の首里城火災修復の件は、高良氏の動きで急速に進み、閣議決定までこぎ着けたようだ。

高良氏は、大龍柱の「向き」の問題は、平成の復元時でも「寸法記」を一級資料として強調し、意見を述べても耳を貸すことがない程、自信たっぷりの態度だった。令和でも大龍柱相対向きを踏襲する気持ちで、菅官房長官を説得してきたと思われる。

■公開討論会

昨年11月の公開討論会で、後多田敦氏（神奈川大学教授）による1877年仏人ルヴェルトが撮影の首里城正殿（大龍柱正面向き）の写真紹介によって、大龍柱の「向き」は正面になる

と大方の県民に理解された。しかし、国の「首里城正殿復元に向けた技術検討委員会」では、大龍柱の向きについては史料や時代背景を踏まえて結論を出す、特に「寸法記」の横向きには未だにこだわりがあるように思われる。

■平成の復元と反省

令和3年3月7日の第3回個別打ち合わせでの、技術検討委員会（高良委員長、田名委員、安里委員、波照間委員）との意見交換会でも、「歴史学の立場」が強調された。私は平成の復元では彫刻の技術だけで復元したのではなく、歴史的なことも踏まえて、古絵図、古写真（明治後期・大正・昭和前期及び戦前）、沖縄神社拜殿図、遺物などを総合的に検討して復元に当たったという見解を述べた。加えて、予め技術検討委員（作業チーム）の皆さんに、具体的な大龍柱に関する拙著・資料に目を通して頂いての参加であったが、それに関しては余り触れられず、貝擦奉行所・尚家文書の絵図や大龍柱の台石と玉陵の碑文の台座、正殿前城元仲秋宴之図などを含めて、焦点は「向き合うスタイルから正面を向くスタイルに変更されたのはなぜか」で、歴史学の立場から向きを検討するという印象を受けた。

■「向き」については多角的に

平成の復元では、「寸法記」を一級史料と強調し、今回は「歴史学の立場」で検討するという。このような言語は抽象的で具体性が無く、混乱を招く要素が含まれている。

大龍柱を復元するに当たって、立体像として復元するには多角的に調査・研究をしなければ出来ないことを知らなければ、復元が安易な

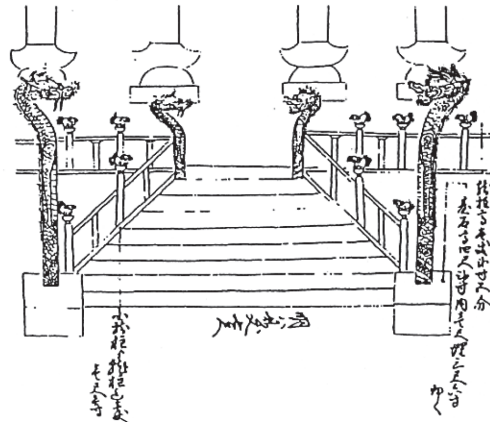
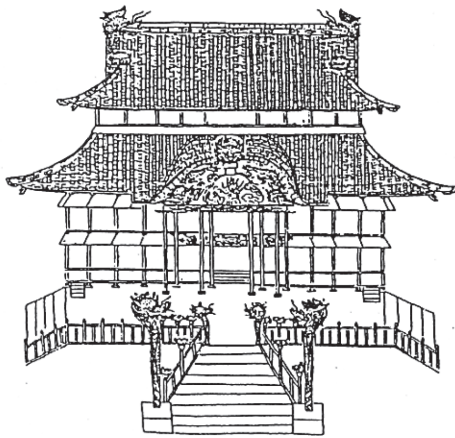
ものとして見られる。向きに関しては「寸法記」の大龍柱の絵図が向き合っているから、という根拠は偏った見方である。

最近の現況で、コロナ禍の中において、「ネット上の人間関係は、リアルに対面しあう状況とは異なり、交わされる情報の多くが言語に偏っている。しかし、私たちのコミュニケーションにおいて、言語によって伝えられる情報は、全体のわずか7%程度に過ぎないと言われている。残りの情報は、身振りや仕草、視線や表情、声色、口調といった非言語によって伝えられる。」という。対面によって情報が得られる、という内容には、大龍柱の向きの問題にも共通性があるよう

に思われる。

■「寸法記」の絵図とは

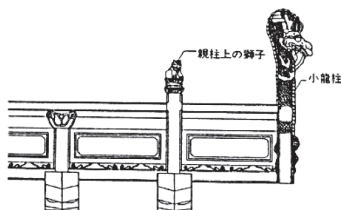
詳細に「寸法記」の絵図を見て判断材料とする。平成の復元では、調査研究して総合的に形を解明してきた。しかし、令和になっても「絵図」に拘る意味とは何か、実際に形を解明した復元と「寸法記」の絵図とを比較してみることにする。詳細は、寸法記の「絵図」の形と、復元した大龍柱と欄干部・獅子像、或は戦前撮影された小龍柱の形や欄干部との比較を通して、以下の図、写真、及び解説を参照されたい。



百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記(略して「寸法記」)＝沖縄県立芸術大学蔵

「寸法記」の大龍柱と復元した大龍柱との比較

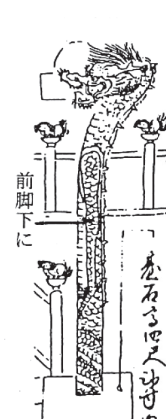
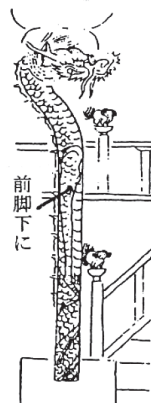
- ・御庭側からみた「寸法記」の大龍柱の前脚は下に向けているが、復元した大龍柱の前脚は上に揚げて宝珠を握っている。
- ・「寸法記」の大龍柱は丸みを帯びた胴体の形だが、復元した大龍柱の胴体は四角柱である。



沖縄神社拝殿図より

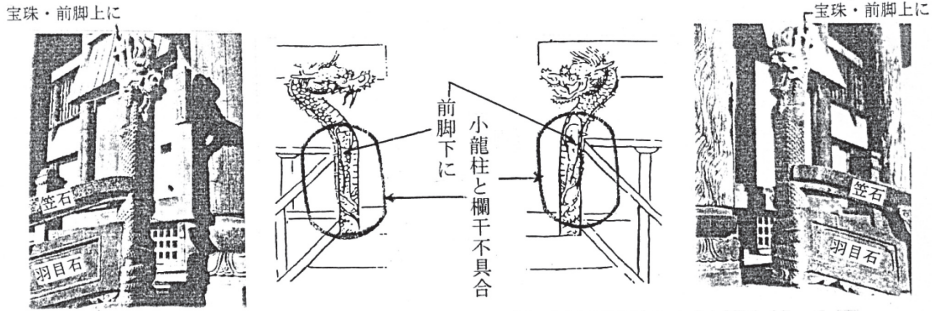


大龍柱咩形

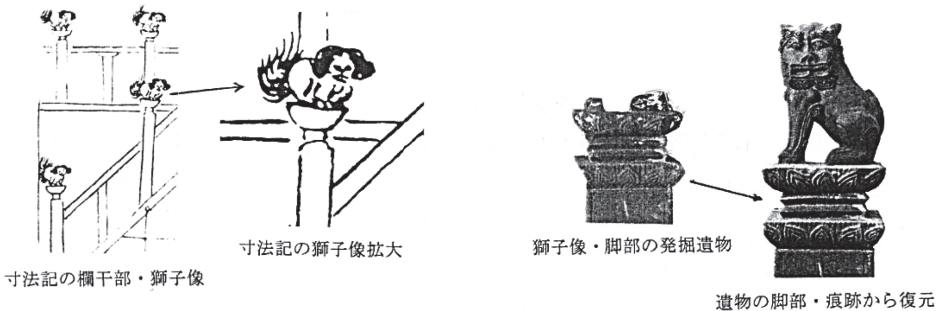


大龍柱阿形





田辺泰撮影の小龍柱及び欄干部に見られる接続関係(「琉球建築」より) ●御庭側から見た小龍柱について、写真では上に揚げる前脚に宝珠を握っているのに対し、『寸法記』では前脚下に向けているという、矛盾がある。 ●小龍柱と欄干の接続面に不合理がある。 ●欄干部の親柱、束柱、笠柱、羽目石、地覆石等、写真と絵図では異なる。



『寸法記』の獅子像と復元した獅子像との比較 ●『寸法記』の獅子像と復元した獅子像には相違がある。 ●獅子像を復元した元となった発掘された遺物には、獅子像の脚部の痕跡があり、それから形を追求して復元がなされた。『寸法記』の獅子像からは復元が難しい。 ●『寸法記』における丸みのある柱に対して獅子像が大きすぎて、獅子像を支える接点の細さは強度がない。

■台石による影響

1768年の「寸法記」の絵図、1877年の仏人ルヴェルトガの写真、昭和10年代の『沖縄神社拝殿図』と、大龍柱は台石に設置されているが、大龍柱を復元し形を解明する中で、本来、台石は無かったと推察する。

その根拠としては、1760年の大地震によって、城壁57箇所が損壊したに関係している。その際、大龍柱は高さ太さが欄干と釣り合っておらず欄干との接続部分に破損がおき8年後に制作された「寸法記」に、台石に設置された形で描かれているという見解が持てる。このことは、大正11年頃の鎌倉芳太郎の写真及び坂本万七の昭和10年代の写真には、台石に隣接する親柱に「ほぞ穴」が未解明に存在することと繋がっていると考えられる。

同じ形態である小龍柱が欄干に繋がれて一体化していることから、大龍柱も同じく欄干に繋がれていたと推測される。また、唐破風からの龍の流れと考えられる末広りの階段(ハの字型)は、広がり効果を狙ったと思われ、階段の先端に大きな台石があることには、疑問を感じる。

美的な面からも、大龍柱は四角柱で垂直に伸びた約3mの高さがあり、台石に載せるのは不自然である。高い大龍柱に台石は、正殿の建物から御庭に繋がるべきものが分離したかたちに見え、龍の流れや構え、位置づけからも関連性を無くしている。

■歴史学の立場とは

「歴史学の立場」で検討するとは、大龍柱の向きについては「寸法記」の絵図の通りに進

めるという意味なのか。あるいは1877年（明治10年）に仏人ルヴェルトガが撮影した写真より以前には、「向き合う形」だったと何らかの文献でもって、どうにかこうにか裏付けて実施する、という考えをにおわせているのか、と憶測している。

「歴史学」について『言泉』（辞書）には、「特に、文字によって書かれる史料（文献）を基本的な材料として過去の人間生活の諸事象を研究する学問」とある。このことから推測すると、私が復元した過程は判断材料にはせず、文献中心で「向き」を決定するということなのか、という疑問を感じている。

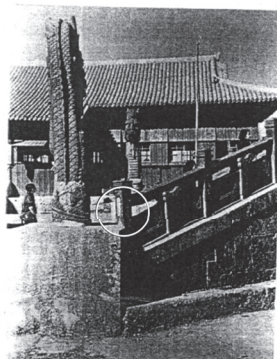
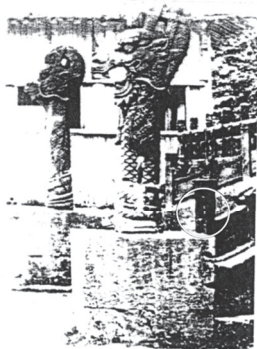
■混乱させている要因

大龍柱の向きに関しては、仏人ルヴェルトガの写真が決定的だと、大方の県民は判断して

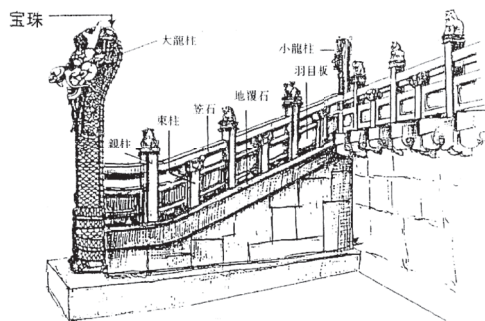
いるが、それに反して、それ以前には大龍柱は向き合っていたらしい、という話もある。また、「どちらでもいいのでは」、という投げやりな発言もある。それだけ混乱させているのが「寸法記」の大龍柱の絵図である。

平成の復元でも、大龍柱の向きの問題があり、復元に不満を漏らすことが聞かれた。挙げ句の果て、台石に回転機を取り付けて、台石を回しながら「正面向き」か「向き合う形」か、で観光客に楽しませては如何という話もあり、エンターティメントとして首里城正殿を造っているので大らかさが必要、という見解まであった。そのようにさせている起因は台石である。

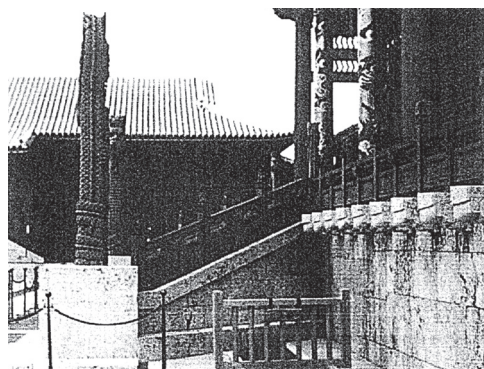
今回の復元は、高良倉吉氏と当時の菅義偉官房長官（当時）とが、どのような方針で令和の再興に望まれたかに掛かっているように思われる。



「ほぞ穴」の足跡(○印) ●左:対象11(1922)年頃=鎌倉芳太郎撮影(「琉球文化の遺宝」より)
●右:昭和10(1935)年頃=坂本万七撮影(「沖縄・昭和10年代—坂本万七遺作写真集—」より)



大龍柱の阿形を階段外側から見た状態(筆者作成)



平成の復元・正殿とは分離した台石に立つ大龍柱(筆者撮影)